

百万石

7号
1979. 4. 16



でんわでもしもし

僕の仕事をかき出す。喫茶店主です。それから了尺の三重支部の事務局長に話を聞いています。

「それから？」

「ええとそれから少年野球の監督の審判。それから子ども会。」

「それから？」

「ええとそれから、まだ言わねえなりませんか。えーと津市西のち地区発展会々長——商店街の役員です。それから、えーとミニショウリジ。まあそんなところですよ。アハハハハ。」

(以上、川北 龍の字さん)

昨日あなたにハカキ出したばかりや。

「それでどんなこと書いてくれた？」

「そんな馬鹿な、ちよつと思ひ出して」

「えーと、それでは——」

昨日、春山山が一転して、今日4月コノカハ上天気アツク。

ボクハ一樹流ノスツアテモ出来バト思ひ、満開ノ宮川ノ下ヲ歩イタ。物ノ時間、桜ノ下デシツターヲ切ツターデアル。

ドウモ気が乗ラシ、何故クドウ。娘が高校ニ入学シタツイウニオレハココノ月収入が無イ。イイ娘ヲシテコンナ事シタイテ

イイノゴロウカ。

山家へ帰ッテ「百万石」が着イテイタ。皆サン、書イテイルコトハ非常ニホシイシテイル。アア、オレハ情ク無イ、ソレデモ、ヒトツワカッタ事ガアル。

(以上、清水 勝通氏)

落ちたのは確かに残念です。それは、入選したかった。でも僕は撮影を続けます。そしてできたら伊勢市中で作品展をやってみたいということも考えています。

自衛隊は本質的に恐いもの、所詮は人殺しの兵器を保持した集団です。

ボクは自分の息子を兵隊にはしたくない。その気持を「手紙」にぶつけて行きたいのです。

それでいいでしょう？

(以上 服部 博さん)

落選のことなんかもう忘れた。

(以上 和洋さん)

この種か、言葉を感じて聞く。

※今更 名古屋を夜出た列車は翌朝まだうす暗い頃に長野に着く。そこから「丸尾」という急行に乗りかえると、登壇前には新潟に到着である。この間、直江津から柏崎までの間は、日本海の海岸線をギリギリに走ることになる。短いトンネルを抜ける度にモノクロームに近い冬の海の風景が眼玉にとび込んでくる。

「久しぶりの大雪でねえ。向いの乗客がほろりと言った。新潟を過ぎると、やがて山形に入る。遠く彼方に真白い雪を冠った美しい山々。羽黒三山、月山である。列車は、小雪になつた在り平野をひた走る。というモロカキ急行で

北のさいはてひとり旅

その(1) 出発(たびだち) 新美 貞治

4月9日の正午過ぎ、伊勢中津市の二水屋酒店は、珍しく昼のテレビのスイッチが切られている。いつもお客さまから見えない所に隠れている(いや間違えた)。いつももの静かに店番をしている大将がもうひとつ元気がない。

それもその名である。つい先程僕も車の中であのいやなニースをう東京と大阪で負けたということを知ったばかりなのである。

たこの空ビンを積んで帰ってきた僕に、今日日は美さんの代りに次女で美人の千抄ちゃん、おかすを温めて出してくれた。そのご飯を食べながら、大将のつぶやきをシラホラと聞えてきた。

「日本の民主主義なんてアメリカに倣って世間したもの、自分たちの力を依りあけたものと違ふ。またみんなわかったらん、ブツブツ」といふ具合の。そこまでは良かったのだが、その後がいけなかった。

例の百万石の話になってきた。

「うたら版、やんぐみえばんと次々と休火山になつてしまったのに、たまりかねて書き始めた百万石も、どうやらそろそろネタが尽しくなってきたらしい。

「もっとみんなから資金も原稿も集めろ」ということなのだ。ちよつと久々に、鶴人からのむかし原稿がきたので、ついでにお前も何か書け。早よう書け、とききた。

そんなわけ、いろいろ考えた挙げ句、結局こんな題で書いてみることにしたのだ。(つまりなかつたりハカキでも下さい。よかつたう、何回か続けますから)



伊勢を出たのはひな祭りの3日の夜。今度もまたというも利尻行きは今回で4回目、中央線に乗り日本海まわりで北海道へ入ることになった。その方が半は多くかかるけれど、この日本海の風景が中々見られるし、心の準備も徐々にできていく。いと思つたからである。

「あんまり元気張らずに振つておいでよ」と永田屋の大将、いやわれらの大先生のまじ言葉。そうだ所詮、僕らは旅人なのだ。

久々の利尻へ行つても、向うに居るのはせいせい。疑問。そしてまたすぐ暖かい南の土地へ戻つて首をす。

そんなわけだから、厳しい冬の生活なんて、本心に理解しよう言つても無理。それより車道に、旅をして見たこと感じたことを写していけばいい。僕も同感だった。

それにしても三重支部は全国の支部に比べて風景が多いい。そして水準も一応高い。その中にあって僕は数少ない人物派というか、生活そのもの派というか、とにかく風景写真は苦手なのである。

それでも例会では今まで、友人の子息をさんさんけなしてきたというよりも、厳しい批判をしてきたものだから、いかに自分も風景派をということになると、凄く不手になつてきた。(※上につづく)

ある。特急よりはずーと遅いのがかえってその方がいいのだ。でも陽が沈むころにはもう秋田に入った。車内には出陣者、からの降りか、東北なまりの津軽弁が聞え出す。その横にはスキーを持っただけの学生ふうの、大なる荷物を持った女の子が週刊誌を読んでいる。春休みの帰省だろう。

列車が青森駅に着いたのは22時ちょうど。僕が伊勢を出てからまる一日たった3月4日の夜だ。

